

おのきた

尾北校長室から

第7号

校章の謎を追う ～ 榎峰

尾道の街並みを南に置くこの丘を今は「榎峰」と呼んでいるが、かつては「榎峠」と呼ばれていたようだ。長江と栗原の集落を行き来する雑木林に峠道（おそらく校門前を通る道）があったことが想像できる。「榎」という字が用いられているのは、**この地に榎の木が多くあった**からだと言われている。そして、その榎という木の葉は、校章に生かされているとも聞かされていた。以来ずっと、榎がどういう木か知らぬまま、校章は榎の木だと思っていた。



【イヌマキ】

柏という木は落葉広葉樹だが、秋に葉が枯れても翌年に新芽が出るまで古い葉が落ちないという特性から「代が途切れない」縁起物とされ、かしわ餅を包むのに用いられ、家紋などにも多用されている。柏が縁起の良い木であることは間違いないが、榎という漢字が基本となるべきこの地において、校章のデザインが「榎」ではなく、なぜ「柏」なのか、という疑問がどうしても湧いてくる。



【柏】

そこで、校章の謎を解くべく、本校の「五十周年記念誌」を紐解いてみた。果たして、校章は昭和24（1949）年に現在の「尾道北」の名称となった時に作られていて、新聞部が呼びかけて懸賞募集し、「**榎の葉三枚を組み合わせた校章**を採用した」とある。デザインの葉は、確かに榎であった。が、由来の記載はどこにもなく、想像するしかない——葉脈のように見える筋は、一つ一つが針葉樹・イヌマキの枝の一本一本であり、**3角形のデザインに整えるため、木全体の形を1枚の葉のように描いたのだ、と思うことにした。**そのイヌマキは、庭木として本校の広い前庭に同窓会館の前など11本を数え、他にも体育館の横に生垣として、小さめのものが一列に並んでいるのを目にすることができる。

だがこの解釈にも無理がある。どう見ても校章は広葉樹の葉3枚である。改めて調べてみることにした。植物名辞典によれば、「**榎**」という固有の名称の木はない。榎という字の説明として、「イヌマキの別称」に並んで、「ブナ科の落葉高木、コナラの別称」ともある。コナラとは、雑木林に自生する、通称「**どんぐりの木**」である。この木もまた「榎の木ファミリー」の一員であることを知った。確かに葉の形も校章の「**ギザギザ**」によく似ている。ちなみにイヌマキは庭木で、雑木林に自生しないという。かくして「この地に榎の木が多くあった」という雑木林の榎とは、どんぐりの木と考えるのが自然である。



【コナラ（どんぐり）】

補足だが、「柏」もまた同じブナ科に属するというから、コナラと「いところ」であり、広義に考えれば**榎の仲間**とも呼べそうである。結局のところ、「榎峰」の象徴として校庭に植えられているのは、**榎の木の代表格・イヌマキ**である。そして校章の葉は、**榎という別称をもつコナラ・どんぐりの木の葉**ということであろう、というのが私の見立てである。どんぐりの木は、伐採しても繰り返しすぐに芽吹くことから、生命力のある木として知られる。本校の校章には、**この丘で学ぶ生徒たちの力強い生命力の願い**が込められていると思うのである。